

▲歩いてきた主人公が旅館の玄関の前へ

▲主人公が呼び鈴を鳴らす

(◇ヒロインボイス扉越し 次の指定まで継続)

(※距離：ちよつと遠い 方向：正面)

C ① 「はい。先輩ですよー？」ハ\*遠くから問いかけるV

C ① 「すみません、今行きますのでー、少しお待ちくださいーい」ハ\*遠くの人に呼び掛ける感じV

▲扉の向こうから走ってくるヒロイン

(◇ヒロインボイス扉越し 解除)

(※距離：普通 方向：正面)

B ① 「お待たせしました、先輩」

B ① 「どうしたんですか？ 難しい顔して」

B ① 「？」

B ① 「……」

B ① 「あ…。いま先輩が考えてる事、わかった気がします」

B ① 「では先にお話してしまいますね」

B ① 「実は、今日から明日にかけて両親が不在なので、旅館の予約をひとつも入れてないんです」

B ① 「だから、顔を見なくても先輩が来たってわかりました」

B ① 「(クスツと笑う) これでどうでしょう？ 答えになってますか？」ハ\*いたずらっぽくV

B ① 「(クスツと笑う) やっぱり当たってたんですね」

▲間

B ① 「なので、今日は先輩の貸し切りです。

私がちゃんとおもてなしますから、楽しみにしててくださいね」

B ① 「さあ、はやくはやく。中に入ってください」

▲主人公玄関の中へ移動

▲少し間

B ① 「（クスツと笑う）2年ぶり…ですよね」ハ\*優しくV

B ① 「はい、わたしが高校1年生の時に会ったきりですから」

B ① 「先輩、なんだかあの頃より身長が伸びたように感じます」

B ① 「（クスツと笑う）それはきっと本人だから気付かないんですよ」

▲短め間

B ① 「あと先輩、頭に寝ぐせついてます」ハ\*いたずらっぽく優しくV

B ① 「もしかして朝からこのままだったんですか？ もう夕方ですよ」ハ\*笑いつつV

B ① 「大人っぽくなったと思ったのに、先輩は先輩のままなんですネ」ハ\*優しくV

B ① 「ちょっと屈んでください、今直しちゃいますから」ハ\*優しくV

（※距離：ほぼ耳元 方向：右前）

A ⑧ 「動かないでくださいねー」

A ⑧ 「こんな感じで…」

A ⑧ 「少し引っ張りますよ」

▲髪をなでつつ寝癖を直す

（※距離：普通 方向：正面）

B ① 「はい。もう大丈夫です、しっかりなおりました」

B ① 「？先輩？ どうしたんですか、顔が赤いですよ」ハ\*笑いつつV

B ① 「（クスツと）都会に出てもそういう所は変わらないんですね」ハ\*笑いつつV

▲少し間

B ① 「では、立ち話もなんですから。そろそろお部屋に向かいましょうか」

B ① 「お履物お預かりしてもいいですか」

（◇靴を脱いで靴箱にしまう、玄関に上がる音）

▲ヒロインが踵を返す

(※距離：普通 方向：マイクと逆)

B  
①

「それではご案内させていただきます」

▲以後、部屋まで歩いていく 1Fで(縁側使うので)

B  
①

「先輩のお部屋は、この廊下の一番奥になります」

B  
①

「(クスツと笑う) なんとなくですけど、角部屋がいいのかなーと思ひまして」

(◇あと少し歩く)

(◇歩く音 停止)

▲ヒロインが主人公の方向に向きなおす

(※距離：普通 方向：正面)

B  
①

「到着です」

B  
①

「ささ、先輩、中へどうぞ」

(◇扉を開ける音)

▲二人とも部屋に入室

B  
①

「こちらが今日一日先輩に過ごしていただくお部屋です」

B  
①

「その…少し見た目は古いですが、すごく日当たりのいいお部屋なんですよ」

(※距離：多少距離有り 方向：正面↓正面奥)

B※

「あつ、お荷物は適当に置いてちゃってください。  
今お座布団出しますんで。ちょっと失礼しますね」

※「今お座布団」辺りからB①からC①へ移動する感じをお願いします

C  
①

「よいしょ…つと」

▲「よいしょ」とか言いながら部屋の奥に置いてある座布団を出す

C  
①

「駅からここまで結構ありますが、歩き疲れましたか？」

C  
①

「(笑い) へとへとですか」

C  
①

「では、とりあえず座ってゆっくりしてください」ハ\*笑いつつV

(◇座布団を敷く音)

(◇主人公座る音)

B ① 「ちょっとお茶をとりにいきますね」

▲ヒロインが部屋の外にお茶を取りに行く

▲お茶を持って戻ってくる

C ⑧ 「お待たせしました」

▲お茶のポットを机に置く

B ① 「麦茶を冷やしておいたんですけど、それで大丈夫ですか？」

▲お茶を取り出して、注ぐ

(※距離：普通 方向：正面)

B ① 「先輩、どうぞ」

▲短い間

B ① 「あ、では私も一杯いただきますね」

▲もう一杯お茶を注ぐ

▲ヒロインもお茶を飲む

B ① 「(お茶を飲むアドリブ)」

B ① 「はあー、冷たくておいしい。しっかり冷やしておいた甲斐がありました」

B ① 「(小さく笑い) 先輩、もう全部飲んじゃったんですか？

(小さく笑い) グラス、かしてください」 ハ\*笑いつつ▽

▲グラスを手に取り、もう一度お茶を注ぎつつ

B ① 「確かに歩いてくると喉渴きますよね。こちら辺、自販機ほとんどないですし」

B ① 「はい、どうぞ」 (◇お茶を置きつつ)

▲長め間

B ① 「ちょっと今更、って感じですけど…お久しぶりです、先輩」

B ① 「都会での生活にはもう慣れましたか？」

B ① 「（笑い）大変なんですね」

B ① 「電話やメールの文面からも疲労感が漂ってましたよ」ハ\*苦笑い▽

B ① 「まあでも、こんな静かな所から一気に大都会じゃ…無理もないのかもしれませんがね」

B ① 「人の量とか、テレビを見てるだけでも疲れそうですし…

あと満員電車とかすごく暑そうで」

B ① 「はい。夏場は大変そうだなーって、いつも思っていました」

▲短い間

B ① 「ほんと、最近だいぶあったかくなってきましたよね」ハ\*優しく▽

B ① 「もうじき夏が来るー…って気がして、ちょっと恐怖を感じてます」

B ① 「今はこんなにガラガラですけど、夏本番にはかなり忙しくなりますから」

B ① 「なんといっても、歩いて4、5分に砂浜がある好立地。

家族連れやカップルの方にはすごく人気なんですよ」ハ\*笑いつつ▽

B ① 「そもそも、こんなに空いているのは今の時期くらいかもしれません」

B ① 「夏以外の時期も…冬は温泉で混みますし、

春も、秋も…まあ、今よりは全然混みますね」ハ\*指折り数えるような▽

▲間

B ① 「（クスツと）私は、今の中途半端なシーズン、好きなんですけどね」

B ① 「はい。毎日のんびりって感じで」

B ① 「あ、でもそれだけじゃないんですよ？ もう一つ好きな理由がちゃんとあるんです」

B ① 「うちの近くの林道を進むと小さな砂浜に出るんです、そこがこの時期すごく綺麗で」

B ① 「ちょうど今くらいの時間ですかね。

過ごしやすい気温なので歩いていて気持ちいいんです」

▲長めの間

B ① 「???」

B ① 「先輩？」^\*小声V

B ① 「…先輩？　きていますか？」^\*小声V

▲間

B ① 「あ（クスツと）」

B ① 「…うとうとしてる」^\*笑いつつ小声V

▲間

B ① 「散歩じゃなくて、お昼寝の時間にぴったりなのかも」^\*笑いつつ小声V

▲間

B ① 「疲れてたのかな」^\*優しく小声で独り言V

▲長めの間

B ① 「寝顔…なんだか可愛い」^\*優しく小声で独り言V

▲間

B ① 「もうちょっと見てたいけど…」^\*小声V

B ① 「この姿勢で寝てるのは辛そうだし、一度起こしてあげようかな」^\*小声V

B ① 「よし」

▲ヒロインが主人公の右耳側へ移動

(※距離：近く　方向：右側)

A ⑦ 「せーんぱいっ、起きてください。

変な姿勢で寝てると身体痛くなっちゃいますよー」　^\*優しく呼び掛けるようにV

(◇上記「せーんぱい」部分で肩を軽く叩く)

▲短い間

▲ヒロインがもとの位置へ戻る

(※距離：普通 方向：正面)

B ① 「ふふっ、もう大丈夫ですか？」ハ\*笑いつつV

B ① 「はい。話の途中で寝てることに気が付きました」ハ\*笑いつつV

B ① 「さっきまでの話、どこまで覚えてますか？」ハ\*笑いつつV

B ① 「(クスツと笑いつつ) 私、結構一人で喋ってたんですね」ハ\*笑いつつV

B ① 「いえ、全然大丈夫です。大した話はしてませんでしたから」ハ\*笑いつつV

▲間

B ① 「あっ、そうだ。私、いいこと思いついちゃいました」ハ\*少しはしゃぐようなV

B ① 「先輩、その引き戸を開けると縁側に出られるのですが、よろしければ一緒にひなたぼっこしませんか？」

B ① 「はい。夕日がとっても気持ちいいので。

きっとお疲れな先輩にぴったりのおもてなしができると思います」

ハ\*優しく自信ありげにV

▲間

B ① 「ありがとうございます。では、いきましようか」

▲立ち上がり窓際へ移動

(◇適宜 フェードアウト)

[END]

▲ヒロインが引き戸を開ける

▲二人とも縁側に出る

(※距離：普通 方向：正面)

B ① 「こちらです」

B ① 「お部屋に虫が入るといけないので、引き戸は閉めちゃいますね」

(◇先ほど開けた引き戸を閉める音)

B ① 「先輩、少しだけ横になるのをお待ちいただけますか」

B ① 「今枕を用意しますので」

B ① 「ちょっと失礼しますね」

(※距離：多少の距離 方向：正面下)

B ① 「(小声で独り言) 座って…脚をおろして…っと」ハ\*呟くように▽

※言いながら正面↓正面下のニュアンスで音の移動をお願いします。

▲ヒロインが独り言を言いながら縁側に座る

▲少し間

B ① 「先輩、準備が整いましたので、こちらに横になってください」

(◇上記台詞「こちらに」部分でヒロインがぼんぼんと自分の腿を叩く)

▲少し間

B ① 「(困惑)？ わかりませんか？ …膝枕なんですけど」ハ\*照れ小声▽

▲少し間

B ① 「もう先輩！ にやにやするのやめて下さい」ハ\*ちょっと照れ焦り▽

▲少し間

B ① 「それに…冷静になると私も恥ずかしいんですから…早くして頂けると助かります」ハ\*照れて小声▽



▲主人公がヒロインに膝枕をされる姿勢するため動く

B※ 「はい。ここに頭をのせちゃって下さい」

※B①から⑧、⑦、⑥、⑤、④、③と移動する感じをお願いします。（難しい場合は要相談。）

（◇上記台詞「ここに」部分でヒロインがぼんぼんと自分の腿を叩く）

▲主人公、右耳が下になるようヒロインの太ももに頭を乗せ膝枕

（※距離：近い 方向：片腕分くらい離れた左）

B③ 「きゃっ」ハ\*軽くV

▲少し間

B③ 「だ、大丈夫です。その、痛かったとかではなく、少し頭の重さにびっくりしただけですから」ハ\*照れ焦りV

▲少し長めの間

B③ 「はじめての経験だったのでわからなかったんですけど…膝枕って想像していたより恥ずかしいものなんです」ハ\*照れV

▲間

B③ 「……」

B③ 「それで先輩、寝心地はいかがですか？」ハ\*優しくV

B③ 「（笑い）そんなにいいものなんでしょうか」ハ\*笑いつつV

B③ 「ふふっ、喜んでいただけてるようなので良かったです」ハ\*優しくV

▲間

B③ 「先輩、少し目を閉じてください」ハ\*囁くようにV

▲間

B③ 「ちゃんと閉じましたか？」

B③ 「???」

B③ 「あー?」

B③ 「一つ質問なんですけど…なんで口をとがらせてるんですか？」

ハ\*疑問感きよとした感じV

B ③ 「キス? ………ちつ、違います!」

私はあたまを撫でてあげたいなって思っただけですから!」ハ\*照れ軽く怒りV

B ③ 「もう、ほんとに先輩って…そんなことばかり考えてるんですね」

▲間

B ③ 「(咳払い) あたま、触りますよ」

▲ヒロインが主人公の頭を優しくなでる

(◇以下頭をなでる音、次の指定まで継続・その他適宜)

B ③ 「(クスツと) 玄関でも思いましたけど、  
先輩の髪の毛って、THE・男の人って感じですよね」ハ\*優しくV

B ③ 「あっいえ、傷んではいけないのですが」

B ③ 「やっぱり私の髪と比べると硬いので」ハ\*優しくV

▲間

B ③ 「でも先輩の髪、私は好きですよ」ハ\*優しくV

B ③ 「よしよし、よしよし、よしよし、よしよし」ハ\*優しくあやす様にかなりゆっくりV

▲ヒロインが「よしよし」頭を撫でる部分、結構時間使ってください

B ③ 「気持ちいいですか?」ハ\*優しくV

▲間

B ③ 「ふふっ、それならよかったです」

B ③ 「なんだかまったりしますね」ハ\*優しく笑いながらV

(◇なでる音停止)

B ③ 「前髪も撫でてみていいですか?」ハ\*優しくV

B ③ 「では先輩、仰向けになってください」ハ\*優しくV

B ③ 「あ、恥ずかしいので目は閉じたままですよ?」

▲主人公が仰向けになる

(※距離：近い 方向：片腕分くらい離れた正面)

B ① 「おー。こうすると先輩の顔がよく見えますね。目を閉じているのでなんだか新鮮です」

(◇以下頭をなでる音再開、次の指定まで継続)

B ① 「よしよし、よしよし、よしよし、よしよし」ハ\*優しくあやす様にかなりゆっくりV

▲間

B ① 「うちはなにもない古い旅館ですが、今日は先輩の疲れを癒せるよう頑張りますので、何かご希望があれば言ってくださいね」ハ\*優しくV

▲間

B ① 「どうかしましたか？ なんだか急に考え込んでるように見えるんですけど…」

▲間

B ① 「え？ もうお願いを思いついたんですか!？」

(◇上記 え？ の前部分で主人公の頭をなでる手を止める)

B ① 「ほんとに先輩って…こういう時だけは頭の回転が早いんですから」ハ\*笑いつつV

B ① 「で、そのお願いってなんでしようか？ 私ができることであればお応えしますので、言ってみてください」ハ\*笑みのニュアンスでV

▲間

B ① 「ふむふむ…耳かきをしてほしい?…ですか」ハ\*神妙な感じV

B ① 「あ、いえ、できない訳ではないんですけど…むしろ、そんな事でもいいんでしょうか？」ハ\*神妙な感じV

B ① 「はあ、男のロマンですか？ …ふふっ、なんか大げさですね」ハ\*笑いつつV

▲主人公が謎の力説

B ① 「(クスッと) はいはい。ちゃんと伝わりました。だからもうロマンの話は大丈夫ですっ」ハ\*笑いつつV

B ① 「はい。大事なお客様のご要望ですから、すぐに耳かきを用意してきますね。ほら先輩、頭を浮かせてください」

▲主人公は頭を浮かせた後に座る

B ① 「はい。ご協力ありがとうございます」

▲ヒロインが立ち上がる

(※距離：1Mくらい 方向：正面)

B ① 「では、少し待っててくださいね」

▲ヒロインが耳かきを取りに部屋に戻る

(◇引き戸の開閉や遠くなる足音など上記▲に付随する音適宜)

[END]

【チャプター③ 耳かき】

▲ヒロインが戻ってくる

(◇引き戸をノック)

(◇下記台詞ドア越し)

(※距離：少し遠い 方向：左後ろ)

C ④ 「先輩、入りますよ？」ハ\*主人公に確認する感じ▽

(※距離：片腕分くらい 方向：左後ろ)

B ④ 「お待たせしました」ハ\*優しく▽

▲主人公振り向く

(※距離：片腕分くらい 方向：左前)

B ② 「……………なんか恐いくらいテンションあがってますね」

B ② 「とりあえず、先輩の好みがわからなかったので、耳かきと綿棒、あとタオルとかも持ってきてみました」

B ② 「思いつく限り色々持ってきてみたのですが、これで大丈夫ですかね？」

▲間

B ② 「あはははは…（引き気味）。異様に力強い肯定の頷き、ありがとうございます」

B ② 「後ろ、座りますね」

▲ヒロインが主人公の後ろに座る

(※距離：近い 方向：後ろ)

A ⑤ 「では、早速ですが…はじめてみましょうか」

A ⑤ 「ふふっ、そんなに喜ぶなんてつくづく変な先輩です」ハ\*笑いつつ▽

A ⑤ 「もうロマンの説明はいいですから！ じっとしててください」

A ⑤ 「まず耳かきの前に、軽く蒸しタオルで耳を拭いていきますね」

▲ヒロインが蒸しタオルで主人公の両耳を拭く

A ⑤ 「タオル、熱くないですか？」

A ⑤ 「ふふっ、私のタオルなので汚れても大丈夫ですよ」

A ⑤ 「もう少し強めでも大丈夫、ですか」

A ⑤ 「わかりました。少し強めにやってみます」

A ⑤ 「ごしごしごし……ごしごしごし、っと」ハ\*独り言囁き▽

A ⑤ 「蒸しタオルって気持ちいいですね」

A ⑤ 「なんかさっぱりした感じがするので私は好きなんです」

A ⑤ 「では、そろそろ。お待ちかねの耳かきに移りましょうか」

A ⑤ 「先輩、どちら側の耳からお掃除しますか？」

▲ヒロインが移動

B ① 「では、右耳を上にして、頭を私の腿に乗せてください」

(◇上記台詞内 ヒロインが腿をばんぽんと叩く音・タイミング適宜)

B ① 「はい。膝枕付きの出血大サービスです」ハ\*笑いつつ▽

▲主人公が右耳を上ヒロインの腿に頭を置く

(※距離：近い 方向：右側)

B ⑦ 「はじめてなので、うまくできるかわかりませんが」

B ⑦ 「先輩、目を閉じてください」

B ⑦ 「最初は普通の耳かき棒ではじめます」

B ⑦ 「いいですか？ 絶対動いちゃダメですからね」

▲ヒロイン耳かきを開始 ※勢いよくではなく、ゆっくり恐る恐るやる感じ

(◇ゆったりした耳かき音 指定があるまで継続) ※時間を使ってください

B ⑦ 「痛いときは遠慮せず言ってください」

▲(耳かき)

B ⑦ 「なんだか不思議です」

B ⑦ 「先輩のほうが年上なのに、お母さんになった気持ちになるというか」ハ\*優しく▽

B ⑦ 「これが母性本能というものなのかもしれません」ハ\*笑いつつ優しくV

B ⑦ 「(クスツと) 耳かきに女のロマンもあったみたいです」

B ⑦ 「あーもう！暴れないでください。暴れると刺さっちゃいますよ」

B ⑦ 「(ため息) ロマンなんて言った私がバカでした」

▲(耳かき)

B ⑦ 「あ、先輩、ちょっと顔を近づけますね」

(◇耳かき音 一旦停止)

▲ヒロインの顔が主人公の耳元付近へ移動

(※距離：耳元 方向：右側)

A ⑦ 「奥の方が暗くて少し見えづらかったので」ハ\*優しくV

A ⑦ 「あと、今顔がすごく近いので、絶対に目を開けないでください」ハ\*照れV

(◇耳かき音 再開 奥の方まで 適宜)

A ⑦ 「やっぱり近づくとうく見えますね」ハ\*軽い驚きV

A ⑦ 「あっ、ここ」ハ\*独り言囁きV

A ⑦ 「ふう」ハ\*独り言囁きV

A ⑦ 「もう少しでとれそう」ハ\*独り言囁きV

A ⑦ 「やった」ハ\*独り言囁きV

A ⑦ 「よし、こんな感じかな」ハ\*独り言囁きV

(◇耳かき音 一旦停止)

▲ヒロイン耳かきから綿棒に持ち替える

(※距離：近い 方向：右側)

A ⑦ 「では先輩、今度は綿棒で軽くふき取りますね」ハ\*優しくV

▲耳かき(綿棒)

(※距離：耳元 方向：右側)

A ⑦ 「やはり耳かきと綿棒では違いがありますね」ハ\*納得するような感じV

A ⑦ 「綿棒は表面の掃除が簡単といえますか…」

A ⑦ 「(クスツと) 耳掃除って意外と奥が深いのかもしれません」ハ\*笑いつつV

▲耳かき (綿棒) 右耳終了

(※距離：近い 方向：右側)

A ⑦ 「右耳は綺麗になったと思いますので、今度は左耳に…」

▲主人公がヒロインの腿上で急に逆を向く

(※距離：近い 方向：右から左)

A ※ 「(驚き) きゃっ！ ちょっと！」ハ\*小さくV

※A ⑦から⑧、①、②、③と移動するような感じでお願います。(難しい場合は要相談。)

(※距離：近い 方向：左側)

B ③ 「もう先輩！ 急に頭を動かさないでください！ いきなりだとびっくりするんですから」

B ③ 「はあ、まだそのテンションのままだったんですね」

B ③ 「まったく…では左耳もはじめますよ」

▲ヒロインの顔が左耳付近へ

(※距離：耳元 方向：左側)

A ③ 「今度は最初から近づいて…っと」ハ\*囁くように独り言V

(◇耳かき音 開始)

A ③ 「(クスツと笑う) 息があたってくすぐったくても我慢してくださいね」

A ③ 「先輩、今更ですけど、私の耳かきはいかがでしょうか？」

A ③ 「(クスツと) ありがとうございます。それが本当なら、凄腕ドクターになれそうですね」

A ③ 「でも、手先の器用さにはあまり自信がなかったのです…素直に嬉しいです」ハ\*笑いつつV



A ③ 「この調子で頑張りますね」

A ③ 「見つけた」ハ\*独り言囁き▽

A ③ 「この奥に大きめのが」ハ\*独り言囁き▽

A ③ 「あと少し」ハ\*独り言囁き▽

A ③ 「とれたとれた」ハ\*独り言囁き▽

A ③ 「うん、きれいきれい」

(◇耳かき音 停止)

(※距離：近い 方向：左側)

B ③ 「そろそろ、また綿棒に持ち替えます」

▲ヒロインが綿棒に持ち替えて、耳かき再開

(耳かき音 (綿棒) 開始)

(※距離：耳元 方向：左側)

A ③ 「綿棒ってほんとに細かい汚れも取れるんですねー」

A ③ 「あまり意識していなかったので驚きました」

▲耳かき

A ③ 「ここの溝をこすって」ハ\*独り言▽

▲耳かき

A ③ 「こんな感じで…っと」ハ\*独り言▽

(◇耳かき音 (綿棒) 停止)

(◇ヒロインが手を叩く)

(※距離：近い 方向：左側)

B ③ 「先輩、お疲れ様です。左耳も綺麗になりましたので」

B ③ 「え? (クスツと) 緊張してたんですか?

とてもそんな風に見えませんでしたけど」ハ\*笑いつつ▽

B ③ 「私は最後の方、かなり集中しちゃってました」

B ③ 「そうだ！ 一度身体を伸ばしましょうか」ハ\*笑いつつV

B ③ 「では先輩、頭ずらしますよー」

▲二人とも立ち上がって伸び

(※距離：普通 方向：正面)

B ① 「んーーーー」ハ\*伸び長めV

B ① 「(息を吐くアドリブ)」ハ\*力が抜ける感じの短めの『はぁ』V

B ① 「こうやって思い切り伸びると、すっきりしますよね」

B ① 「ふう。ではそろそろ最後の仕上げに移りましょうか」

B ① 「先輩、こちらに座って下さい」

B ① 「ふふっ、残念そうですね、もう膝枕はおしまいです」ハ\*いたずらっぽくV

▲主人公が座る、ヒロインはその後ろに

(※距離：近い 方向：後ろ)

A ⑤ 「準備できましたか？」

A ⑤ 「ではまず、濡れたタオルで後ろから耳を拭きますね」

▲ヒロインが濡れたタオルで軽く両耳を拭く

A ⑤ 「細かい汚れもしっかりとって」

A ⑤ 「耳の穴に少し指をいれますねー」

(◇濡れタオルで拭く音 停止)

A ⑤ 「あとは最後に乾いたタオルに持ち替えて」

▲ヒロインが乾いたタオルで軽く両耳を拭く

A ⑤ 「軽く拭いて…っと」

(◇乾いたタオルで拭く音 停止)

A ⑤ 「おしまいです」

A ⑤ 「お疲れ様です、先輩」

▲主人公が振り向く

B ① 「あ、いえいえ、お礼なんていらないですよ」

B ① 「なんだかんだ私も楽しんじゃってましたし」ハ\*優しくV

B ① 「…それに、先輩の甘えん坊さんな一面も見れましたから」ハ\*いたずらっぽくV

B ① 「ふふっ、今更照れてももう遅いです」ハ\*優しく笑いつつV

▲間

B ① 「そろそろ日も落ちてきましたし、少し早いですが戻ってお夕飯にしましょうか」

B ① 「はい。私もお腹減ってきちゃいました」ハ\*笑いつつV

B ① 「もう仕込みは終わらせてありますので、すぐお持ちできますよ」

B ① 「(クスツと) お口に合うと嬉しいのですが」ハ\*笑いつつV

B ① 「では、使ったものを全部持って…っ」ハ\*独り言っぽくV

▲ヒロインが使ったものを片づける

B ① 「よし。お待たせしました先輩、では戻りましょうか」

▲二人で部屋に戻る(適宜フェードアウト)

[END]

(◇箸を置く音)

(◇手を合わせる音)

▲二人で食事を終わる 二人とも座ってる

(※距離：普通 方向：正面)

B ① 「ごちそうさまでした」ハ\*ゆっくり▽

B ① 「もうお腹いっぱいですー。ちょっと作りすぎちゃいましたかね」ハ\*満足そうに▽

B ① 「お味のほうはいかがでしたか？」ハ\*疑問系▽

B ① 「(クスツと) 本当ですか？ それなら頑張った甲斐がありました」ハ\*嬉しそう▽

B ① 「今日の献立は以前母に習ったものなので、多少自信があっただけなんですけど…」

B ① 「いざ食べていただくとすると、やっぱり不安で(安堵の笑い)」

B ① 「だから先輩に『美味しかった』って言われてホッとしました」ハ\*安堵▽

B ① 「はい、素敵なお嫁さんになるために、  
これからも精進あるのみですね」ハ\*嬉しそうに冗談▽

▲間

B ① 「先輩はこの後どうしますか？」

B ① 「ふむふむ……」

今日は疲れたからお風呂に入ったらすぐ寝る……ですか」ハ\*小声で思案してる感じ▽

B ① 「あ、いえ。なんでもありません  
とっても健康的なご予定だなーって思っただけです」  
ハ\*「とっても」部分いたずらっぽく▽

B ① 「食器、さげちゃいますね」

▲ヒロインが立ち上がり、食器を片づける

(※距離：近く 方向：正面)

B ① 「先輩の食器も一緒に…」

▲主人公の食器をヒロインが片づける

▲それなりに時間使った間

▲まとめた食器を部屋の入口へ運ぶ

(※距離：少し遠め 方向右奥)

C⑧ 「では、台所に運んできますね」

◇引き戸を開ける音◇

▲ヒロインが部屋を出ようとして立ち止まる

C⑧ 「あの、先輩？」^\*小声▽

C⑧ 「よろしければ、食後にお散歩なんていかがでしょうか？」

C⑧ 「お疲れのところ、急なご提案なのはわかってるんですけど…」

C⑧ 「せっかくなので、一応訊いてみようかと思ひまして」^\*自信なさげに笑いつつ▽

▲間

C⑧ 「え…？ 耳かきのお礼…ですか？」

「ありがとうございます。すごく嬉しいです」^\*「お礼…ですか？」 部分まで小声▽

C⑧ 「では、食器を片付けてすぐ支度してきますので、待ち合わせは玄関でお願いします」

▲ヒロインが急いで食器を下げに部屋の外へ

▲部屋の外の廊下途中でヒロインが立ち止まる

(※距離：遠い 方向：適宜)

C⑧ 「せんばーい！ 一つ仕事を忘れていました！」^\*遠くから話す感じ▽

C⑧ 「すみませんが十分後に玄関でお願いしますー！  
終わり次第すぐ行きますでー」^\*遠くから話す感じ▽

▲ヒロインが主人公から離れる

(◇適宜フェードアウト)

[END]

【チャプター⑤ 夜の散歩】

※波の音が入ります シーンに合わせて適宜調整お願いします

▲玄関前にて主人公・ヒロイン待ち合わせ

▲ヒロインが小走りで主人公の所に向かってくる

(※距離：普通 方向：正面)

B ① 「(呼吸) すみません先輩。遅くなりました」ハ\*慌ててきた感じV

B ① 「(呼吸) 今呼吸を整えますから」

B ① 「(深呼吸アドリブ)」

B ① 「はぁ。ちょっと急ぎすぎちゃいました」ハ\*笑いつつV

B ① 「???」

B ① 「どうかしましたか? なんだか驚いてるように見えますけど」

B ① 「ああ、もしかして服装のことですか?」

B ① 「さすがに旅館の服のまま外には出れないので、制服に着替えたんです」ハ\*笑いつつV

B ① 「ふふっ、懐かしかったですか?」

▲間

B ① 「今お履物お出しますね」

▲玄関へ靴を出しに動く 主人公・ヒロインともに靴を履く

(※距離：普通 方向：正面 マイクと逆)

B ① 「電気は…付けたままでいいかな」ハ\*小さく独り言V

▲玄関の引き戸を開け外に出る

▲ヒロインが鍵を閉める

(※距離：近い 方向：マイクと逆に)

B ① 「戸締り確認、よし」ハ\*小さく独り言V

(※距離：普通 方向：左側)

※主人公側（マイク側）と進行方向側あり

B③ 「暗いので懐中電灯をつけてと……では行きましょうか」

▲二人とも歩き出す

B③ 「そんなに長く歩かないので安心してくださいね」

▲間

B③ 「うちの周り、あまり街灯がないので、足元に注意してください」

B③ 「先輩が怪我しても、私じゃ病院まで運べないですから」ハ\*いたずらっぽくV

▲間

B③ 「やっぱり夜はまだ涼しいですね。一応上着を羽織ってきて正解でした」

B③ 「先輩は寒くないですか？」

B③ 「（クスッと）私のほうが寒がりなのかもしれません」

▲間

B③ 「あ、こっちです」

▲間

B③ 「先輩、ちょっと止まってください」

▲二人とも立ち止まる

(◇本当に小さく波の音)

B③ 「聴こえますか？」

B③ 「ふふっ、ちゃんと耳を澄ませてみてください。わかりませんか？」

(◇先ほどより少し大きな波の音)

B③ 「正解です。さ、あと少し歩けばゴールですから」

▲散歩再開

(◇浜辺が近くなってくるのを表現してください 適宜)

▲目的地（浜辺）に到着

（◇歩く音 停止）

B  
③

「到着です」

B  
③

「少し休憩がてら浜辺に座りましょうか」

▲二人とも移動

（◇浜辺を歩く音）

▲二人とも腰掛ける

B  
③

「帰りに電池が切れるといけないので、懐中電灯消しちゃいますね」

▲ヒロインが懐中電灯の電気を消す

▲長めの間

（※距離：近い 方向：左側）

B  
③

「（クスッと笑う）真っ暗でなにも見えません」ハ\*笑いつつV

▲少し間

B  
③

「いつもはとっても綺麗な景色なんですよ?」

B  
③

「海に夕日が沈む瞬間とか最高なんですから」

B  
③

「本当は夕方お誘いしたかったんですけど…  
誰かさんがすごく眠そうでしたから…」ハ\*いたずらっぽくV

▲少し間

B  
③

「でも、こうして夜に歩くのも悪くないですね」

B  
③

「…こんな時間だからこそ、浜辺が貸し切り状態ですし」ハ\*笑いつつV

▲長い間

B  
③

「波の音、落ち着きますね」



▲長い間

B ③ 「先輩、もう少し近くに寄ってもいいですか？」

(◇ヒロインが主人公のそばに移動)

(距離：かなり近く 方向：左側)

A ③ 「ありがとうございます。その……少し身体が冷えてしまったようなので」

▲少し間

A ③ 「星が綺麗」ハ\*独り言っぽく▽

A ③ 「先輩、上、見てください。星がすごく綺麗ですよ」

A ③ 「こんなに綺麗な星空が此处で見れるなんて知らなかった」ハ\*独り言っぽく▽

▲少し間

A ③ 「先輩、今お願い事をしたら、  
あの星まで届きそうな気がしませんか？」ハ\*いたずらっぽく▽

A ③ 「(クスツと) つれないですね。まあ確かに流れ星が一般的ですもんね」ハ\*笑いつつ▽

▲間

A ③ 「でもこの砂浜：地元の人の間では、『幸せを呼ぶ砂浜』って呼ばれてるんですよ」

A ③ 「なんでも、近くに縁結びの神様が祭られているとかでして」

A ③ 「学校のクラスでも

『浜辺で告白したお陰で結ばれたー』なんて言ってる女の子もいるんです」

A ③ 「あー、信じてないって顔してますねー」ハ\*笑いつつ▽

A ③ 「：まあ、私もあまり信じてなかったんですけど、結構いるんですよ信じてる人」

▲間

A ③ 「都会に出ると、こんな星空は見れないですか？」

A ③ 「そうなんですネ。ここは何もない所だと思ってましたけど、  
意外と違うのかもしれない」

▲間

A ③ 「やっぱりさっきの話、なんだか信じてみても良いような気がしてきました」

A ③ 「はい。神様の話です。だって此处でしか見れない星空なんですよ？」ハ\*笑いつつ

A ③ 「なんでも集まる都会にないくらいなんですから！」

A ③ 「きっと何かご利益があるに決まってます」ハ\*笑いつつ

▲間

A ③ 「……それとも、先輩と一緒にだかそう思うのかな？」ハ\*小声独り言

A ③ 「(クスツと笑う) なんでもありません」(冗談っぽくはぐらかす)

▲間

A ③ 「さて、そろそろ戻りましょうか」

▲上記「さて」くらいでヒロインが自分の腿を叩く その後立ち上がる

(※距離：普通 方向：左側)

B ③ 「はい。ずっとここにいたら風邪ひいちゃいますし」ハ\*笑いつつ

B ③ 「懐中電灯、スイッチON」

▲ヒロインが懐中電灯のスイッチを入れる

B ③ 「帰りも足元に注意してくださいね」

▲二人して歩き出す

B ③ 「……なんだかちょっぴり名残惜しいな」

B ③ 「そうですね。またいつか一緒にこの夜空が見れたら嬉しいです」

B ③ 「先輩、お付き合いありがとうございました」

▲間

B ③ 「あっ」ハ\*思い出したように

▲ヒロインが立ち止まって浜辺の方向に振り返る

B③ 「（クスツと笑う）今日から帰る時はお礼をしなきゃと思ひまして」

B③ 「砂浜の神様に、です」（＊笑いつつ）

▲間

B③ 「えーっと…今日は素敵なお時間をくださってありがとうございます」ハ＊仰々しくV

B③ 「あと………」

B③ 「またいつか先輩と一緒に星を見れますように」ハ＊すごく小声早口V

▲ヒロインが海に向かってお辞儀

B③ 「どうかしましたか？ （クスツと笑う）なにも言っていないですよ」

B③ 「ほんとですって。」

あー。先輩、もしかして都会の騒音で耳が悪くなったのかもしれないね  
ハ＊いたずらっぽくV

B③ 「さあさあ。お礼も済みましたし、今度こそ戻りましょう」

B③ 「あっつーい温泉が待ってますから」ハ＊笑いつつV

B③ 「（笑い）なんで先輩まで一礼してるんですか」ハ＊笑いつつV

B③ 「ほーらっ、行きますよ」

B③ 「うちの温泉、狭いですけど評判良いんですから」

▲二人とも歩き出す

◇ 「（笑い）なんで先輩まで一礼してるんですか」部分あたりからフェードアウト 適宜

[END]

【チャプター⑥ お風呂に来訪者】

※主人公は浴場に置いてある椅子に座っている状態です（銭湯とかにあるようなやつ）

（◇始まり方は適宜調整お願いします）

▲主人公がシャワーを浴びたりしてる

（◇ヒロインボイス浴場の扉越し すりガラスみたいなやつです）

（※距離：遠い 方向：右）

C⑦ 「先輩、湯加減はどうですかー？」ハ\*呼びかける感じV

C⑦ 「（小さく笑い）ご満足いただけてるみたいでよかったです」ハ\*優しくV

▲間

C⑦ 「あー先輩」ハ\*呼びかける感じV

▲主人公がシャワーを止める

▲少し間

C⑦ 「今からそちらにご一緒しても大丈夫ですかー？」

C⑦ 「うーん：そうですねー（思案する）。  
散歩にお付き合いたいいただいたお礼？ …といったところでしょうか。  
お背中を流せればー、と思ひまして」

▲間

C⑦ 「あ、心配しなくて大丈夫ですよ。私は服を着たまま入りますから」ハ\*バツサリV

▲短い間

C⑦ 「あれ？ なんだか妙に声のトーンが下がりましたがけど」

C⑦ 「（クスツと）もしかして、予想してた展開と違いましたか？」  
ハ\*「もしかして〜」部分いたずらっぽくV

C⑦ 「ふふっ、そうですね。

先輩がそんな事考えるわけじゃないですよね」ハ\*いたずらっぽく笑いつつV

C⑦ 「では、タオルとか用意して来ますのでー」

▲ヒロインが浴場の扉付近から離れる

▲ヒロイン立ち止まる

(※距離：さらに少し離れた感じ 方向：右)

C ⑦ 「あ！ あとひとつ大事なことを忘れてました」

C ⑦ 「一応の確認事項ですけど、必ず前：隠してくださいねー」  
ハ\*笑いつつ遠くから呼びかける感じ▽

C ⑦ 「だって、事故があったら怖いじゃないですか」ハ\*笑いつつ▽

C ⑦ 「それはさすがに一大事なので」

C ⑦ 「見る方も見られる方も、誰も得しないですよー」

C ⑦ 「ふふっ、冗談です。先輩、もしかして傷ついちゃいましたー？」

C ⑦ 「先輩も可愛いところがあるんですねー」

(◇「だって、事故が」 台詞部分よりフェードアウト 適宜)

[END]

【チャプター⑦ 背中流し】

(◇以下次の指定までヒロインボイス浴場の扉越し すりガラスみたいなやつです)

▲主人公シャワーを出している

(距離：遠い 方向：右)

C ⑦ 「先輩、お待たせしました」

▲主人公シャワーを止める

C ⑦ 「もうお邪魔しても大丈夫ですか？」

C ⑦ 「ありがとうございます」

▲間

C ⑦ 「あと……自分から言い出しておいて申し訳ないんですけど、出来たら目を閉じてもらっていいですか？」

C ⑦ 「やっぱり背中を流している時に目が合ったら恥ずかしいので」

▲間

C ⑦ 「すみません。では、失礼します」

▲ヒロインが浴場扉を開けて入る

▲その後主人公の背中側までゆっくり移動

(◇ヒロインボイス浴場の扉越し解除)

(※距離：かなり近め 方向：左後ろ)

B ④ 「先輩、ちょっと顔を覗きますよ？」

(※距離：近い 方向：左前)

A ② 「(クスツと笑う)、約束通りちゃんと目は閉じてくれてるみたいですね」

B ⑤ 「まずは……少し冷えたかもしれないので、軽くお湯で流します」

▲ヒロインがシャワーノズルを手にする

▲ヒロインが自分の手にお湯をあてて温度確認

B ⑤ 「これくらいで熱くないかな」

B ⑤ 「流しますね」

▲ヒロインが主人公の背中にシャワーをあてる

B ⑤ 「あつくないですかー？」

B ⑤ 「少し背中触りますね」

▲ヒロインが主人公の背中を撫でつつ流す

B ⑤ 「そろそろあったまりましたか？」

▲ヒロインがシャワーを止める

B ⑤ 「では、ボディースープを泡立てますので、少しお待ちください」

▲ヒロインがタオルでボディースープを泡立てる

B ⑤ 「先輩は見えないと思いますけど、このタオルはすごく泡立ちがいいんです」

B ⑤ 「私が少し使ったタオルなのが申し訳ないのですが、  
たぶん先輩にも満足していただける気持ちよさですので」

▲少ししてヒロインが手を止める

B ⑤ 「???」

B ④ 「先輩? …どうしましたか？」

B ④ 「(困惑)? はい、最近はこのタオルを使ってます。なにせお気に入りですから」

▲ヒロイン泡立てを再開

▲間

(◇泡立てる音 停止)

B ④ 「先輩…耳が真っ赤ですよ…?」

(◇泡立てる音 再開)

B ⑤ 「シャワーちょっと熱かったかな」ハ\*小声独り言V

B ⑤ 「よーし。泡立ちました。もうモコモコです」

(◇泡立てる音 停止)

B ⑤ 「では、背中をタオルで擦りますね」

▲ヒロインが主人公の背中をタオルで擦る

(※距離：さらに近く 方向：後ろ)

B ⑤ 「お客様へ、かゆい所はございませんか？」^\*ちよつとふざけつつV

B ⑤ 「ふふっ、人の背中を流すのって結構楽しいんですね」

B ⑤ 「力加減はどうでしょうか？」

B ⑥ 「もっと強くて大丈夫ですか？ はい、やってみます」

B ⑤ 「ごしごし、ごしごし」

B ⑤ 「こんな感じでよろしいですか？」

B ⑤ 「では、肩のほうもこのまま洗います」

B ⑤ 「ごしごし、ごしごしっと」

B ⑤ 「先輩の背中、大きいですね」

B ⑤ 「こうしてまじまじ見ると気が付きます」

B ⑤ 「男の人って感じがして：すごくかっこいいですよ」

B ④ 「ふふっ、もしかして照れちゃいましたか？」

B ④ 「冗談です（笑い）では、しっかり洗えたので流しますね」

B ④ 「いえいえ、私も楽しかったです」

▲ヒロインがシャワーを手に取り温度調整

B ④ 「先ほどと同じくらいの温度で大丈夫ですか？」

B ⑤ 「わかりました。少しぬるくしますね」

B ⑤ 「では、首の方から流します」

▲ヒロインがシャワーで主人公の背中を流す



B ⑤ 「気持ち良かったですか？」

B ⑤ 「ふむふむ…懐かしい感じる…。ふふっ、なんとなくわかる気がします」

B ⑤ 「小さい頃、私も母の背中を流した記憶がありますので」

B ⑤ 「肩のほうまで流しちゃいますね」

B ⑤ 「お待たせしました、おしまいです」

▲ヒロインが主人公の背中洗い終わる

(◇シャワー音 停止)

B ⑤ 「お疲れ様です、先輩」

B ⑤ 「もう立ち上がっていただいて大丈夫ですよ」

B ⑤ 「え？ ……『目を閉じていて動けない』？」

B ④ 「あっ、すみません。すっかり忘れてました」

B ④ 「まだ目を閉じていてくれてたんですね。ありがとうございます」

B ④ 「はいはい（クスツと）先輩は約束を守る男、ですもんね」

B ④ 「でももう開いていただいて構いませんよ」

▲短い間

B ⑤ 「先輩………目は開きましたか？」

B ⑤ 「では、そのまま、ゆっくりこちらに振り向いてください」

▲主人公が振り向く（上半身のみ）

(※距離：近い 方向正面)

B ① 「（小さく笑い）びっくりしましたか？」

B ① 「はい。タオルを巻いただけの恰好ですね」

B ① 「あー、いま露骨に目をそらしませんでしたかー？」ハ\*いたずらっぽく▽

▲主人公が正面に向きなおる

B ⑤ 「ふふっ。また背中を向けちゃった」

▲ヒロインが主人公の耳元に後ろから近づく

(※距離：耳元 方向：左耳)

A ③ 「ずっとこの格好で先輩の背中を流してたんですよ（クスツと）」

▲ヒロインが主人公の耳元から離れる

(※距離：近い 方向：後方)

B ⑤ 「やっぱり服が濡れると困りますからね」

B ⑤ 「ほら、ちゃんとしっかりタオルを巻いてるので大丈夫ですから。こっち向いてくださいーい」

▲少し間

B ⑤ 「それに……」ハ\*いたずらっぽく▽

▲ヒロインが主人公の耳元に後ろから近づく

(※距離：耳元 方向：左耳)

A ③ 「先輩にだったら……見られてもいいですよ？」ハ\*いたずらっぽく小声▽

▲長い間

▲ヒロインが主人公の耳元から離れる

(※距離：近い 方向：後方)

B ⑤ 「（こらえ笑い）」

B ⑤ 「ぷっ（笑い）もう先輩！ 急に黙らないでください」

B ⑤ 「すみません、冗談です、冗談」

B ⑤ 「困った反応が面白かったので、ついいたずらしちゃいました」

B ⑤ 「（クスツと）もう機嫌なおしてくださいよー」

B ⑤ 「そうだ。先輩は先に温泉につかっててください。小さいですけど露天風呂なので気持ちいいですよ」

B ⑤ 「あの温泉に浸ければ、先輩の機嫌もたちまち元通り」

B ⑤ 「はい。本当です。ぜひ試してみてください」

B ⑤ 「では、私も軽くシャワーを浴びたら向かいますので、お先に楽しんでいてくださいね」

（◇適宜 フェードアウト）

[END]

【チャプター⑧ 二人で露天風呂】

※露天風呂なので夜の野外です そんなに広い空間ではありません

▲主人公は先に湯船に浸かっている

▲ヒロインが引き戸を開ける

(※距離：少し遠い 方向：正面)

C② 「お待たせしました。ご機嫌はいかがですか？」

C※ 「ふふっ、上機嫌みたいでなによりです。

でも、相変わらず目はそらすんですね」ハ\*「でも」いたずらっぽく▽

※C②からB②へと移動するようにお願いします。

▲上記台詞はヒロインが主人公の方に歩いて近付きつつ

(※距離：普通 方向：正面やや左)

B② 「先輩、お隣いいですか？」

B② 「私の姿が目に入らないようになら…？ ふふっ、先輩らしいですね」

B② 「うーん…あつ、では背中合わせならどうでしょう？」

▲主人公が端に移動（時計回りに90度向きつつ）

B④ 「（クスツと）ありがとうございます。」

そんなに端に寄って狭くないんですか？」ハ\*笑いつつ▽

(※距離：普通 方向：左側やや後ろ)

B④ 「問題ないならいいんですけど…。では、失礼しますね」

▲ヒロインが湯船に浸かる 位置は主人公の背面

(※距離：近い 方向：マイクと逆)

B⑤ 「はあ………。気持ちいい」ハ\*独り言▽

B⑤ 「先輩、いかがでしょう？ うちの露天風呂」

B⑤ 「少し狭いですけど、健康に効果がある温泉なんですよ」

B⑤ 「お風呂から上がるころには先輩も若返っちゃいます」ハ\*冗談っぽく▽

▲長め間

B⑤ 「先輩、背中をくつつけてみてもいいですか？」

B⑤ 「（クスツと）意味なんてありません。ただの思い付きです」

B⑤ 「ありがとうございます。ではお言葉に甘えて…」

A⑤ 「えいっ」

▲「えいっ」の部分でヒロインが主人公の背中に自分の背中をくつつける

A⑤ 「（クスツと）くつついちゃいました」

▲少し間

A⑤ 「先輩の背中すべすべです。」

これはさつき綺麗に洗すぎたかもしれません」

A⑤ 「ほら、こうやって背中を動かすとすぐよくわかりますよ」

A⑤ 「すりすりー、すりすりー」ハ\*ふざけつつ▽

▲ヒロインが主人公の背中を自分の背中ですする

A⑤ 「きゃっ！先輩、いきなり暴れないでください」ハ\*笑いつつ▽

（◇ヒロイン「きゃっ」台詞部分で大きめの水音）

A⑤ 「『やられたらやり返す』…？わかりました、宣戦布告ですね。そういう事ならっ…」

A⑤ 「えいっ、えいっ」ハ\*ふざけつつ▽

A⑤ 「あー！先輩、また反抗する気ですね！」

A⑤ 「あっ、いきなりっ、もう、そんなに押さないでくださいよ」ハ\*くすぐられているような感じ▽

A⑤ 「あははは！わかりましたっ！先輩強い、強いですからっ！」ハ\*くすぐられているような感じ▽

A⑤ 「もう降参、降参です！ふふっ、負けましたから！ストップ、ストップですー！タオル取れちゃいますからっ！」ハ\*くすぐられているような感じ▽

A ⑤ 「はあはあ（荒い呼吸）」ハ\*笑いすぎて息切れV

A ⑤ 「：やっと止まってくれましたー」

A ⑤ 「（クスツと）先輩のせいで、  
おしくらまんじゅうみたいになっちゃったじゃないですかー」 ハ\*ふざけて笑いつつV

A ⑤ 「もう笑いすぎて一気に疲れちゃいました」

A ⑤ 「ちょっと呼吸を整えさせてください」

A ⑤ 「（深呼吸アドリブ）」

▲間

A ⑤ 「ふふっ、先輩も、息上がってますね」

A ⑤ 「ほら、背中越しに呼吸が大きいのがよくわかります」

▲少し間

A ⑤ 「（落ち着いてきた呼吸）」

▲間

A ⑤ 「ふうー。だいぶ落ち着きました」

▲間

A ⑤ 「ただの思い付きだったんですけど：…なんだかこういうのも悪くないですね」

A ⑤ 「（クスツと）だって、顔を見なくても相手を感じることができますから」

▲間

A ⑤ 「きっと今、先輩は小さく笑ってます」

A ⑤ 「正解ですか？」

A ⑤ 「（クスツと）やっぱり。背中から全部伝わっちゃいますね」

▲少し間

A  
⑤

「私、今すごくドキドキしてるんです」

A  
⑤

「（クスツと）なんででしょうね。  
さっきまで、結構慣れてきたつもりだったんですけど」

A  
⑤

「（クスツと）まだ少し恥ずかしいのかもしれませんが」

▲長め間

A  
⑤

「どうでした？ 今日1日この旅館で過ごしてみて」

A  
⑤

「そうですか。少しでも先輩の疲れが取れたのなら、お誘いしてみても正解でした」

▲少し間

A  
⑤

「明日の朝には、もう戻られるんですよね？」

A  
⑤

「……ふう、なんだかあつという間でした」

A  
⑤

「（クスツと）そんな…『寂しいかー？』なんて聞かれたら……  
…そりゃあ寂しいに決まってるじゃないですか」

▲間

A  
⑤

「だって…2年前までずっと一緒だったんですよ」

▲長め間

A  
⑤

「仲良かったですよー、私たち」

A  
⑤

「いつも一緒に……。なんていうんですかね？  
波長が合う？ って感じでした（クスツと）」

A  
⑤

「そうです、そうです。以心伝心！ なんでも分かり合えるのがすごく居心地よくて」

A  
⑤

「（クスツと）ほんと、楽しかったですよね…」

▲長め間

A ⑤ 「先輩……。少し真面目な話があるんですが、聞いていただけますか？」

A ⑤ 「ふふっ。…ありがとうございます」

▲間

A ⑤ 「私は…あの頃の居心地の良さを壊したくなくて、2年前に考えるのをやめた事があるんです」

A ⑤ 「先輩、なんの話かわかりますか？」

A ⑤ 「（クスツと）…私の中で先輩がどういう存在かっていう話です」

▲長め間

A ⑤ 「漠然とになっちゃうんですけど、最初は……年上に対する憧れ？　って感じから始まったと思います」

A ⑤ 「（クスツと）はい。いわゆる先輩と後輩って感じですね」

▲間

A ⑤ 「そこから、だんだん仲良くなっていつて。いつの間にか一緒に過ごす時間がどんどん増えていきました」

A ⑤ 「ふざけて笑ったり、くだらない事で喧嘩したり、あ！　結構まじめに怒ってたこともあるんですよ？」

A ⑤ 「そんな中で、先輩のダメダメな所も、かつこ悪い所も………それに、少しだけある素敵な所も見つけることができました」

A ⑤ 「ふふっ。少しだけじゃご不満ですか？」

▲間

A ⑤ 「そうやって楽しく過ごしているうちに………いきなり先輩の引っ越しがあって」

▲長めの間

A ⑤ 「最初は…ただただ悲しかったです」



A ⑤ 「先週まで笑顔でそこにいたのに、もうここにはいない」

A ⑤ 「先輩の声を聞きたかったし、顔を見たくてしようがなかった」^\*涙堪えつつV

A ⑤ 「毎日泣いていたので、目なんかすごく腫れちゃって」^\*涙堪えつつV

A ⑤ 「(クスツと)ほんと、見られなくてよかったです」^\*涙堪えつつ笑うV

▲長めの間

A ⑤ 「ある夜、真剣に考えました」

A ⑤ 「『なんでこんなに先輩に会いたいのかな』……って」

▲間

A ⑤ 「答えはすごく簡単でした。……ほんとに、小さい子でもわかるような簡単な事」

▲長めの間

A ⑤ 「……先輩。私の気持ちって、もう伝わってますよね」

▲間

A ⑤ 「ふふっ、よかった……。以心伝心は変わってなかったみたい」

▲少し間

A ⑤ 「ただ、今はまだ…この気持ちを胸の奥にしまっておいてもいいですか？」

A ⑤ 「理由は聞かずに、あと少しだけ待っていてください」

▲間

A ⑤ 「その時が来たらきつと伝えますから…。しっかりと受け止めてくれると嬉しいです」^\*優しくV

▲少し間

A ⑤ 「あの……黙って聞いてくださって…ありがとうございました」

A ⑤ 「はい。やっと伝わったんだーって思うと、なんだかスッキリしました」

A ⑤ 「先輩って、実は優しかったんですね」ハ\*涙を堪え笑うV

A ⑤ 「ふふっ。今初めて知りました」ハ\*涙を堪え笑うV

▲長め間

A ⑤ 「……」

B ⑤ 「えいっ！」

▲「えいっ」部分でヒロインが主人公に水をかける

B ⑤ 「あれ？ やっぱり顔にお湯がかかると熱かったですか？」

B ⑤ 「ちょっとしんみりしちゃいましたから！  
雰囲気を変えようかと思いましたが！」ハ\*明るくV

▲二人で水の掛け合い状態

B ⑤ 「さあさあ、先輩！ 優しいだけだと、やられっぱなしになっちゃいますよー？」  
ハ\*冷かしつつ笑うV

B ⑤ 「それ！ もう一回！」

B ⑤ 「きゃー、先輩が怒ったー！」

B ⑤ 「まじめな話が台無しー？」

B ⑤ 「（クスッと）さあ？ どうなんでしょうね？  
さっきの話も、いつもの冗談かもしれませんよ！」

B ⑤ 「あははは、強い、押す力が強いですー」

◇「きゃー、先輩が怒ったー！」からフェードアウトしてく感じ 小さく台詞聞こえるような

[END]

【チャプター⑨ 就寝】

(◇ヒロインボイス部屋の扉越し、主人公仰向けで寝ている)

(※距離：遠い 方向：左)

C ② 「先輩、今そちらにお邪魔しても大丈夫ですか？」

C ② 「はい。では失礼しますね」

▲ヒロインが扉を開けて入室

(◇ヒロインボイス部屋の扉越し 解除)

C ② 「すみません。もしかして寝るところでしたか？」

C ② 「あ、横になったままで構いませので」

C ② 「お疲れの先輩に、マッサージでもしてあげようかと思ひまして」

C ② 「気にしないで下さい。好きでやってる事ですから」

C ② 「それと、一応さっきお話を聞いていただいたので。  
お礼も兼ねてます」ハ\*少し恥ずかしそうに▽

▲問

▲ヒロインが主人公の傍へ移動

(※距離：普通 方向：左)

B ② 「では先輩、うつ伏せになってください」

▲主人公うつ伏せになる

B ⑥ 「掛け布団、ずらしますね」

▲主人公の掛け布団をヒロインがずらす

B ⑥ 「今から腰の上に乗りますけど…重かったらごめんなさい」

(※距離：近い 方向：後ろ)

B ※ 「よいしょ…っと」 ※B ⑥から⑤と移動するように願ひします

▲ヒロインが主人公の腰部分に馬乗り

B ⑤ 「先輩？」

▲少し間

B ⑤ 「その…重くないですか？」

B ⑤ 「(クスツと) ちゃんとしっかり食べてますよ？」

身長がそこまで大きいほうではないので、普通かと思います」

B ⑤ 「では、マッサージはじめますね」

▲ヒロインが主人公のマッサージ開始

▲親指を押してほぐすようなマッサージ

B ⑤ 「最初は背中をほぐしていきます」

B ⑤ 「1、2、3、4、1、2、3、4、1、2、3、4、1、2、3、4、」

ハ\*すぐくゆつくり▽

(◇マッサージ音一旦停止)

B ※ 「次は上の方にずれて…っと」 ※B ⑤からA ⑤に近くようにお願いします

▲ヒロインが主人公の腰の位置から更に上部へ移動

(◇マッサージ音 再開)

A ⑤ 「よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、」ハ\*すぐくゆつくり▽

※マッサージに動きが欲しいので、『よいしょ』の部分に若干マイクに近づくなど、  
ニュアンスだけでなく、音の動きもいれて下さい。

A ⑤ 「よく母にしてあげてますから、マッサージにはちょっと自信があるんです」

▲ヒロインがマッサージの手を止める

▲ヒロインが主人公の上部から腰の位置へ移動

B ⑤ 「では次に、背中から肩にかけて叩きますね」

B ⑤ 「まずはゆつくり」

▲ヒロインが叩くようなマッサージを開始

B ⑤ 「力加減大丈夫ですか？」

B ⑤ 「わかりました。もう少し強めですね」

B ⑤ 「どこかこつてる所ありますか？」

B ⑤ 「じゃあ、肩は重点的にやっちゃいます」

▲ヒロインがマッサージの手を止める

B ⑤ 「よし、では最後に、指圧のような感じで押し込みますね」

▲ヒロインが指圧マッサージを開始

B ⑤ 「（力む吐息アドリブ）」ハ＊押し込むような感じの息を4回×2回ほどください▽

B ⑤ 「あつ、もしかして、眠くなってきましたか？」

B ⑤ 「ふふつ、ではそろそろ終わりにしましょう」

▲ヒロインがマッサージの手を止める

B ⑤ 「今、どきますね」

▲間

（※距離：普通 方向：右側）

B ⑥ 「どうでしたか、私のマッサージ」

B ⑥ 「ふふつ、よかった」

B ⑥ 「では、お布団かけますから、仰向けになってください」

▲主人公が仰向けになる

▲ヒロインが主人公に布団をかける

B ② 「（クスツと）今の先輩、動きがのろのろでカメみたいです」

▲少し間

B ② 「あの、先輩が眠るまで、隣にいてもいいですか？」

B ② 「（クスツと）いたずらなんてしませんよ」

B ② 「眠りやすいように羊か何か数えてあげようと思ひまして」

B ② 「なので、先輩は気にせず寝ちゃってください」

▲少し間

B ② 「電気、小さくしますね」

▲小さい灯りに

B ※ 「では、隣に失礼して……………っと」

※ 『隣に失礼して〜』あたりからB ②からA ②に移動する感じをお願いします。

▲ヒロインが主人公の耳元に移動

(※距離：耳元 方向：左側より)

A ② 「こほんっ、数えはじめます」

A ② 「……………」

A ② 「カエルが一匹：カエルが二匹：カエルが三匹：カエルが……………」ハ＊冷静にV

(※距離：普通 方向：やや左側より)

B ② 「どうしたんです？ 急に目を見開いて？」ハ＊あっさりV

B ② 「いえ、至ってまじめです。此処は田舎ですから、羊よりカエルのほうが合ってると思ひまして」ハ＊笑いつつV

B ② 「それにカエル：結構かわいいじゃないですか」

B ② 「『羊がいい』？……………ですか。  
はぁ。いつの間にか先輩も都会っ子になってしまったんですね」

B ② 「あ、では間をとって狸にしましょう。狸はごく稀に都会でも見るらしいですし」

A ② 「えーっと、狸が一匹：狸が二匹：狸が三匹：狸が四匹：狸が五匹：狸が六匹…」

(◇上記台詞「えーっと、狸が一匹〜」ら辺からフェードアウト 適宜)

[END]

(◇玄関の引き戸を開ける音)

B ⑤ 「今日も気持ちいい朝ですねー」

B ⑤ 「(クスツと) はい。洗濯物がよく乾きそうです」

▲二人とも旅館から外へ

▲間

B ① 「先輩、お忘れ物はありませんか？」

B ① 「そうですか。なにか見つけたらお電話しますね」

▲長め間

B ① 「では…短い間ではございますが、  
当館をご利用いただき、誠にありがとうございました」ハ\*仰々しくふざけつつ▽

B ① 「ふふっ。ほんとに短い時間だったのが残念ですけど」

▲間

B ① 「(クスツと) 私も名残惜しいです。…でも、きっとまた会えますから」

B ① 「それまで元気でいてくださいね」

B ① 「…いつも先輩の事想ってますから」

B ① 「はい。メール、お待ちしております。あ、でも、変な文章は送らないで下さいよ？」

B ① 「(クスツと) 以前授業中に開いてしまった時は、ほんとに大変だったんですから！」

B ① 「笑うのを必死に堪えて、もう過呼吸になりそうでした」

▲長めの間

B ① 「そろそろ…時間ですか？」

B ① 「では先輩、気を付けて帰ってくださいね！」

▲間

B ① 「いってらっしゃいませ」ハ\*優しくV

▲間

▲主人公が背を向ける その後歩き出す

▲長め間

C ⑤ 「せんばーい！」

▲主人公が振り返る

C ① 「わたし、すっごく楽しかったです！」ハ\*遠くから呼びかける感じV

C ① 「昨日今日の事、忘れませんか！ 先輩も絶対忘れないでください！」

C ① 「会いに来てくれて、ほんとに、ありがとうございましたー！」  
ハ\*遠くから呼びかける感じV

C ① 「電車！ 寝過ごさないでくださいよー！」ハ\*遠くから呼びかける感じV

C ① 「お元気でー！！」ハ\*遠くから呼びかける感じV

(◇適宜 フェードアウト)

[END]



(◇駅構内の音)

▲ホームで主人公が電車を待っている

▲少し間

(◇着信音が鳴る)

▲主人公が携帯をポケットから出して電話に出る

(◇ボタン音)

(◇ヒロインボイス電話越し)

※電話へのフィルター、バイノーラル加工はミックス時に行いますので、  
通常マイク（コンデンサー等）での収録をお願いします。

A ⑦ 「もしもし」

A ⑦ 「先輩、今お電話大丈夫ですか？」

A ⑦ 「（クスツと）ギリギリセーフ。ではもうすぐ出発なんですネ」

A ⑦ 「よかった、間に合って」

A ⑦ 「やっぱり忘れ物がありましたよ」

A ⑦ 「さあ…？ なんでしょう」

A ⑦ 「わかりませんか？」

A ⑦ 「ふふっ、先輩がわからなくても仕方ありません」ハ\*笑いつつV

A ⑦ 「私が一つお伝えする事を忘れていただけですから」

A ⑦ 「………」

A ⑦ 「実は来年、先輩が住む近くの大学を受験するんです」

A ⑦ 「きゃっ！ もう、そんな大きな声出さないでください！」ハ\*笑いつつV

A ⑦ 「…はい、本当です。今回は嘘でも冗談でもありません」ハ\*嬉しそうに優しくV

A  
⑦

「なので、受験がうまくいった際には、合格報告ともう一つお伝えしなきゃいけない事がありますので」

A  
⑦

「…先輩、楽しみに待っていてください」

A  
⑦

「………」

A  
⑦

「(クスツと) もう先輩? なにか喋ってくださいよー」

(◇ホーム音声『まもなくー2番線に東京行きー、  
なんちゃらかんちゃらが**10**両編成で…』)

A  
⑦

「…電車、来るみたいです」

(◇電車が来る音)

A  
⑦

「先輩、今から半年間、私も頑張りますから、必ず元気でいてください」

A  
⑦

「…今度は私が先輩に会いに行きますからっ」

A  
⑦

「はい、約束ですよ。指は…電話なので切れないですけど、嘘ついたら針千本のませますからね」

A  
⑦

「では先輩、お気を付けて。はい、失礼します」

(◇ボタン音)

▲少し間

(◇ホーム音声『まもなくー、2番線より東京行き  
なんちゃらかんちゃらが発車となります…』)

▲主人公が電話をポケットに戻す

▲主人公が電車に乗る

(◇笛の音) ※電車発信のピーって高い音のやつ

(◇電車のドアが閉まる音)

[ALL END]